

青年期女性の喫煙習慣とライフスタイルに関する研究

(その1) 喫煙習慣とライフスタイルとの関連および性格特性からの比較

村松常司 (健康科学選修) 村松園江・秋田 武 (東京水産大学)
片岡繁雄 (北海道教育大学旭川校) 金子修己 (中部大学)

SMOKING AMONG YOUNG FEMALE AND THEIR LIFESTYLE

(Report 1) Relationship between smoking behavior, lifestyle and personality

Tsuneji MURAMATSU (Department of Health Science)
Sonoe MURAMATSU・Takeshi AKITA (Tokyo University of Fisheries)
Shigeo KATAOKA (Hokkaido University of Education, Asahikawa Campus)
Osami KANEKO (Chubu University)

I. はじめに

喫煙の健康被害についてはこれまでに数多くの報告^{1)~3)}がなされ、今日では喫煙の健康に及ぼす害についてはもはや疑いの余地はない。日本たばこ産業の調査⁴⁾では、1990年の喫煙者率は男性60.5%、女性14.3%であり、20代女性は19.5% (前年度比3.1%増)であり、我が国の成人男性の喫煙者率は全年齢層にわたって減少傾向にあるが、女性においては逆に増加傾向にあり、特に20代女性では顕著である。

女性の喫煙者率の増加⁵⁾の原因としては、女性の社会進出が進み、ストレス解消のためたばこを求める者が増えたことや、たばこ会社が女性に的をしばったシガレットのパッケージやCMを作り出していることなどが考えられる。青年期女性の喫煙は本人への影響だけでなく、胎児、乳幼児への影響が大きく⁶⁾⁷⁾、青年期女性の喫煙は重大な問題となる。

村松⁸⁾は女子学生を対象に交友関係、流行指向性を中心とした日常生活行動様式と喫煙行動を調査し、喫煙する女子学生の特性として積極的な行動パターンを明らかにし、これは喫煙が身体に悪いとか他人に迷惑がかかるなどの認識と自己の喫煙行動との間の矛盾を和らげるものであると報告している。

また、Breslowら⁹⁾は、成人病予防の視点から重要な7つの健康習慣(喫煙をしない、飲酒を適度にするかまたは全くしない、定期的にかなり激しい運動をする、適正体重を保つ、7~8時間の睡眠をとる、毎日朝食をとる、不必要な間食をしない)を見出し、これら7つの健康習慣を多く行っている、いわゆるライフスタイルの良い集団と、悪い集団を追跡し、両者の死亡率には差があることを実証した。

そこで、本研究は青年期女性を対象に、日常生活や Breslow の健康習慣(ライフスタ

ル)と喫煙習慣との関連を追究し、さらに、性格特性がそれらにどう関連しているかについて追究した。

II. 調査方法

(1) 調査対象

対象者は表1に示すように、女子学生(国立大学, 私立大学, 私立短期大学)631名, および看護婦(看護婦, 保健婦)151名, 幼稚園職員32名, 会社員139名の計953名である。対象者の年齢分布は18歳から29歳であり, 平均年齢は21.0歳(S.D.=2.5)であった。

(2) 調査内容

1) 喫煙習慣

- ①喫煙者率
- ②両親の喫煙者率

2) 喫煙についての一般的意識

村松¹⁰⁾は青少年のたばこについてのイメージを抽出し, 身体的項目, 情緒的項目, 倫理的項目に類型した。本調査ではこの類型を利用し, 身体的項目(13項目), 情緒的項目(8項目), 倫理的項目(12項目)を調査した。

3) 健康習慣(朝食摂取状況, 間食摂取状況, 起床時間, 就寝時間, 睡眠時間, 体重に気をつけているか, 栄養のバランスに気をつけているか, 運動状況)

4) 日常生活行動様式

- ①マスメディアとの接触(雑誌購読, 書籍購読, テレビ視聴時間, CM興味, 新聞購読時間)
- ②日常生活(1カ月の小遣い, 休日行動, 家族との会話)
- ③趣味・嗜好(趣味, 好みの飲料, 飲酒)
- ④流行の取り入れ(流行取り入れ対象, 化粧)
- ⑤一般的意識(生活をエンジョイ, 周囲の目, 伝統・習慣への態度, イライラするか, 女性としての意識)

5) エゴグラムチェックリスト

今回, 性格特性を探るために利用したエゴグラム¹¹⁾⁻¹³⁾は Berne の創始した交流分析を Dusay が改良し考案したものである。交流分析では, 性格の構成要素を Parent (P), Adult (A), Child (C) として考えており, さらに Parent を Critical Parent (CP) と Nurturing Parent (NP) に, Child を Free Child (FC) と Adapted Child (AC) に分け, 合わせて5つの要素に分類している。交流分析では, CP (Critical Parent) を支配的・批判的要素, NP (Nurturing Parent) を成長を促す養育的・母親的要素, A (Adult) を事実に基づいて判断し, 冷静に計算する合理的要素, FC (Free Child) を感情や身体感覚を自然に体験・表出する要素, そして, AC (Adapted Child) を外界に順応するために防衛し, 妥協する要素と規定している。調査は5つの要素に対してそれぞれ10項目ずつの項目で構成されたエゴグラムチェックリストを使用し

表1 対象者数 (%)

| 職業 | 人数 (%) |
|---------|-------------|
| 学生 | 631 (66.2) |
| 看護婦・保健婦 | 151 (15.8) |
| 幼稚園教諭 | 32 (3.4) |
| 会社員 | 139 (14.6) |
| 合計 | 953 (100.0) |

た。

なお、調査の正確性を期すために MMPI の妥当性尺度¹⁴⁾を参考に回答の信頼性をチェックする質問項目を作成し、矛盾回答得点とした。

(3) 調査期間および調査方法

調査は平成4年9月～11月に自己記入による無記名質問紙法で行った。回収数は970名であり、記入不備および矛盾回答得点の高い17名を除外した。従って有効回答数は953名(98.2%)であった。

(4) 分析方法

1) Breslow の健康習慣

喫煙習慣、健康習慣および日常生活行動様式の質問事項の中から、Breslow⁹⁾の7つの健康習慣「喫煙をしない」「飲酒を適度にするか又は全くしない」「定期的に運動する」「適正体重を保つ」「7～8時間の睡眠をとる」「毎日朝食をとる」「不必要な間食をしない」に相当する7項目のうち実施している項目の数を得点化した。その中で、実施数0～3, 4～5, 6～7の者をそれぞれ、ライフスタイルの悪い者、普通の者、良い者とした。

2) 喫煙についての一般的意識

身体的、情緒的、倫理的の合計33項目の回答は各々5段階で得点化し、喫煙習慣別、健康習慣別に平均得点を算出した。否定的項目は点数が小さいほど、肯定的項目は点数が大きいほど「喫煙」に対して否定的といえる。

3) エゴグラム

CP (Critical Parent), NP (Nurturing Parent), A (Adult), FC (Free Child), AC (Adapted Child) の5つの自我状態への心理的なエネルギーを視覚的につかむために、エゴグラムチェックリストの回答を得点化し、グラフ(エゴグラム)を作成し、喫煙習慣別、健康習慣別に比較した。

4) データ処理ならびに比較の方法

データ処理にあたっては、名古屋大学大型計算機センター FACOM M-382 を使用し、演算には SPSS 第9版を用いた。なお、検定は χ^2 検定ならびにコルモゴロフ・スミルノフ検定および t 検定によって行った。

III. 結 果

(1) 喫煙習慣

対象者の喫煙者率は表2に示すように、「毎日吸う」4.1%、「時々吸う」3.4%、「以前吸っていたが、今は吸わない」3.6%、「吸わない」88.9%であった。本研究では、「毎日吸う」と「時々吸う」者を喫煙者(71名)、「以前吸っていた」者と「吸わない」者を非喫煙者(875名)とした。

両親の喫煙者率は父親が55.1%、母親が4.8%であった。対象者の喫煙習慣別に比較してみると、父親の喫煙者率は喫煙者では57.1%、非喫煙者では54.9%であり、母親の喫煙者率は喫煙者では7.0%、非喫煙者では4.6%であり、両親の喫煙習慣と対象者の喫煙習慣には有意な関連は認められなかった。

(2) Breslow の7つの健康習慣(以下、健康習慣とする)

健康習慣実施数は図1に示す。喫煙者では7項目のうち3つの項目を実施している者が

表2 喫煙者数 (%)

| 喫煙習慣 | 人 数 (%) | |
|---------|-------------|------------|
| 毎日吸う | 39 (4.1) | 71 (7.5) |
| 時々吸う | 32 (3.4) | |
| 以前吸っていた | 34 (3.6) | 875 (92.5) |
| 吸わない | 841 (88.9) | |
| 合 計 | 946 (100.0) | |

(N.A.=7)

最も多かった (32.4%) が、非喫煙者では5つの項目を実施している者が最も多く (32.0%)、両者の分布は有意の差が認められた ($P < 0.01$)。また、実施数0~3のライフスタイルの悪い者、4~5の普通の者、6~7の良い者を喫煙習慣別に見たものが表3であり、喫煙者では「悪い」者が最も多く、非喫煙者では「普通」の者が最も多く、有意の差が認めら

れた。

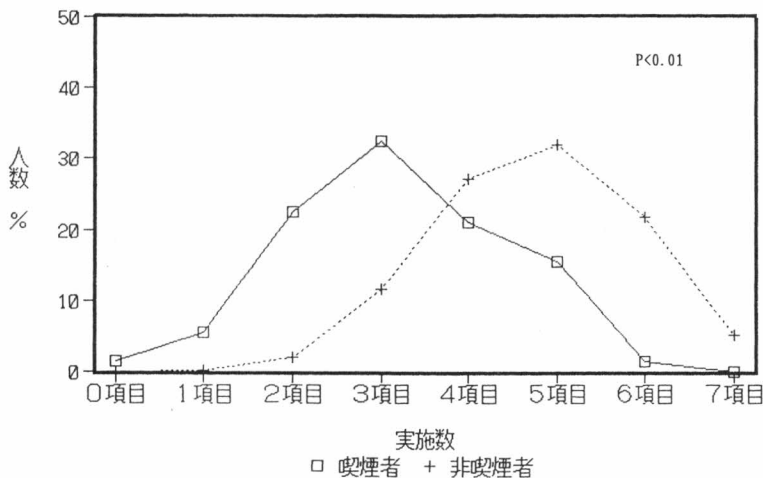
個々の項目ごとにみても、喫煙習慣別にみて有意の差が認められたのは、喫煙を除く6項目のうち、「朝食摂取状況」($P < 0.01$)、「睡眠時間」($P < 0.05$)、「飲酒習慣」($P < 0.01$)の3項目であった。すなわち、非喫煙者の約8割は朝食を毎日とっているが、喫煙者は朝食を摂るものが半数にも達していないこと、喫煙者は睡眠時間が短いこと、酒を飲む者が多いことがわかった。また、Breslowの7つの項目に関連する「栄養のバランスを気をつけているか」の項目でも両者の差が認められ ($P < 0.01$)、非喫煙者の方が栄養に気を使っていることがわかった。

(3) 喫煙習慣からみた日常生活行動様式

1) マスメディアとの接触

マスメディアとの接触と喫煙習慣との関連は表4に示す。「ファッション誌の購読」、「女性誌の購読」に有意の差が認められ、喫煙者は非喫煙者に比べ、女性誌を読むことが多く、ファッション誌を読むことが少ない。「書籍購読」「テレビ視聴時間」「CMに対する興味」には差は認められなかったが、「新聞購読時間」には有意な差が見られ ($P < 0.01$)、喫煙者は新聞を読む時間が短いことがわかった。

図1 健康習慣実施数



2) 日常生活

喫煙習慣別にみて対象者の日常生活に有意の差が認められたのは、「1カ月の小遣い」($P < 0.05$)、「家族との会話」($P < 0.01$)であった。すなわち、喫煙者は非喫煙者に比べて小遣いが多く、家族との会話が少ない。「休日行動」には有意の差が認

表3 健康習慣実施数 (%)

| 健康習慣実施数 | 喫煙者 | 非喫煙者 | 合計 |
|----------|-------------|---------------|---------------|
| 0～3 (悪い) | 4 4 (62.4) | 1 2 1 (13.8) | 1 6 5 (17.4) |
| 4～5 (普通) | 2 6 (36.6) | 5 1 8 (59.2) | 5 4 4 (57.4) |
| 6～7 (良い) | 1 (0.4) | 2 3 6 (27.0) | 2 3 7 (25.1) |
| 合計 | 7 1 (100.0) | 8 7 5 (100.0) | 9 4 6 (100.0) |

(P<0.01) (N.A.=7)

表4 マスメディアとの接触 (%)

| | 喫煙者 | 非喫煙者 | 合計 | 喫煙者と非喫煙者との比較 |
|---------|-------------|---------------|---------------|--------------|
| ファッション誌 | 1 0 (14.1) | 2 2 6 (25.8) | 2 3 6 (24.9) | P<0.01 |
| 女性誌 | 1 6 (22.5) | 9 9 (11.3) | 1 1 5 (12.2) | P<0.05 |
| 料理誌 | 1 1 (15.5) | 9 3 (10.6) | 1 0 4 (11.0) | N. S. |
| 一般誌 | 4 (5.6) | 6 6 (7.6) | 7 0 (7.4) | N. S. |
| 少女コミック | 3 (4.2) | 2 0 (2.3) | 2 3 (2.4) | N. S. |
| 少年コミック | 0 (0.0) | 1 8 (2.1) | 1 8 (1.9) | N. S. |
| 芸能誌 | 1 (1.4) | 1 6 (1.8) | 1 7 (1.8) | N. S. |
| 男性誌 | 2 (2.8) | 8 (0.9) | 1 0 (1.1) | N. S. |
| 大人のコミック | 1 (1.4) | 3 (0.3) | 4 (0.4) | N. S. |
| その他 | 3 (4.2) | 2 8 (3.2) | 3 1 (3.3) | N. S. |
| 雑誌は読まない | 2 0 (28.2) | 2 9 8 (34.1) | 3 1 8 (33.6) | N. S. |
| 合計 | 7 1 (100.0) | 8 7 5 (100.0) | 9 4 6 (100.0) | —— |

(N.A.=7)

められなかった。

3) 趣味・嗜好

趣味・嗜好と喫煙習慣との関連は表5、表6に示す。趣味は「自動車運転」,「コーヒーを好む」に有意の差が認められた。すなわち、喫煙者は非喫煙者に比較して、自動車運転を楽しむ者が多く、コーヒーをよく飲む者が多い。

4) 流行の取り入れ

流行の取り入れについては表7に示す。流行の取り入れに関する項目では「女性としての生き方」に有意の差が認められ、喫煙者は非喫煙者に比べ女性としての生き方に流行を取り入れている。また、「化粧をする習慣」にも有意の差がみられ (P<0.01), 喫煙者はメイクアップまでする者が多く、非喫煙者は何もしないか基礎化粧品だけする者が多い。

5) 一般的意識

「周囲の目を気にする」,「伝統や習慣を残そうとする」に有意の差が認められた (P<0.01)。「生活をエンジョイしているか」「よくイライラするか」「女のくせにと言われると

表5 趣味（喫煙習慣別比較）

複数回答

| | 喫煙者 人数 (%) | 非喫煙者 人数 (%) | 合計 人数 (%) | 喫煙者と非喫 煙者との比較 |
|--------|---------------|----------------|--------------|------------------|
| 音楽 | 46 (64.8) | 515 (60.0) | 561 (60.3) | N. S. |
| 旅行 | 32 (45.0) | 354 (41.2) | 386 (41.5) | N. S. |
| スポーツ | 23 (32.4) | 312 (36.3) | 335 (36.0) | N. S. |
| 読書 | 23 (32.4) | 307 (35.7) | 330 (35.5) | N. S. |
| 映画 | 21 (29.6) | 289 (33.6) | 310 (33.4) | N. S. |
| スポーツ観戦 | 12 (16.9) | 190 (22.1) | 202 (21.7) | N. S. |
| 自動車運転 | 27 (38.1) | 167 (19.4) | 194 (20.9) | P<0.01 |
| 楽器演奏 | 6 (8.4) | 103 (12.0) | 109 (11.7) | N. S. |
| 手芸 | 1 (1.4) | 19 (2.2) | 20 (2.1) | N. S. |
| ビデオ観賞 | 1 (1.4) | 6 (0.7) | 7 (0.7) | N. S. |
| その他 | 2 (2.8) | 51 (5.9) | 53 (5.7) | N. S. |
| 対象者の数 | 71 (100.0) | 859 (100.0) | 930 (100.0) | — |

(N. A. =23)

腹が立つか」「女だからという理由でしたいことを押えるか」では有意の差が認められなかった。従って、喫煙者は非喫煙者に比べ、周囲の目を気にせず、伝統や習慣を残そうとする者が少ない。

(4) 喫煙習慣からみた喫煙に対する一般的意識

喫煙習慣別にみた喫煙に対する意識の平均得点は図2に示すように、身体的項目では13項目のうち7項目、情緒的項目では8項目すべてに、倫理的項目では12項目のうち8項目に有意の差がみられた。各項目ごとの喫煙者、非喫煙者間の得点の開きの平均をみると、身体的項目13項目は0.55、情緒的項目8項目では1.35、倫理的項目12項目では0.60であった。すなわち、両者間では、特に情緒的項目において差が大きく、喫煙者は喫煙に対して肯定的である。

(5) エゴグラム

図3、図4はエゴグラムにおけるCP、NP、A、FC、ACの各要素の平均値を図示し、喫煙習慣別比較、健康習慣別比較を行ったものである。

1) 喫煙習慣別比較 (図3)

喫煙習慣別にみて有意の差が認められたのは、「A」「FC」「AC」であり、喫煙者はFC(自由奔放さ)が高く、非喫煙者はA(客観的判断力)、AC(順応性)が高かった。「CP(批判的要素)」、「NP(養育的・母親的要素)」には有意の差は認められなかった。

2) 健康習慣別比較 (図4)

健康習慣別にみて有意の差が認められたのは「CP」「NP」「A」であり、ライフスタイルの良い者は他に比べ、批判的要素(CP)、養育的・母親的要素(NP)、客観的判断力(A)が高かった。「FC(自由奔放さ)」、「AC(順応性)」には有意の差は認められなかった。

表6 飲み物の嗜好 (喫煙習慣別比較)

複数回答

| | 喫煙者 人数 (%) | 非喫煙者 人数 (%) | 合計 人数 (%) | 喫煙者と非喫 煙者との比較 |
|----------|---------------|----------------|--------------|------------------|
| 日本茶 | 12 (16.9) | 234 (27.1) | 246 (26.3) | N. S. |
| 紅茶 | 15 (21.1) | 197 (22.8) | 212 (22.7) | N. S. |
| コーヒー | 24 (33.8) | 169 (19.6) | 193 (20.6) | P<0.01 |
| 牛乳 | 6 (8.5) | 115 (13.3) | 121 (12.9) | N. S. |
| 清涼飲料水 | 11 (15.5) | 105 (12.1) | 116 (12.4) | N. S. |
| ウーロン茶 | 1 (1.4) | 18 (2.1) | 19 (2.0) | N. S. |
| スポーツドリンク | 1 (1.4) | 17 (2.0) | 18 (1.9) | N. S. |
| その他 | 1 (1.4) | 9 (1.0) | 10 (1.1) | N. S. |
| 対象者の数 | 71 (100.0) | 864 (100.0) | 935 (100.0) | — |

(N.A.=18)

表7 流行を取り入れる対象 (喫煙習慣別比較)

複数回答

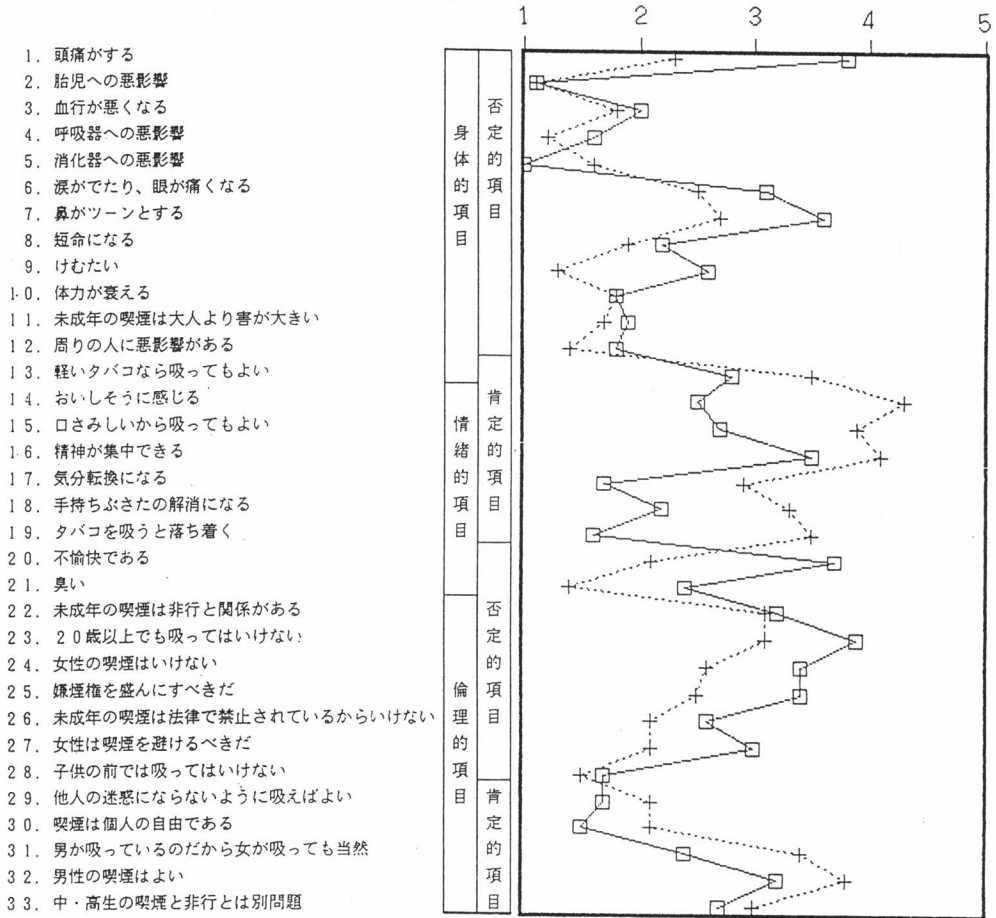
| | 喫煙者 人数 (%) | 非喫煙者 人数 (%) | 合計 人数 (%) | 喫煙者と非喫 煙者との比較 |
|-----------|---------------|----------------|--------------|------------------|
| 服飾 | 52 (75.4) | 617 (76.9) | 669 (76.8) | N. S. |
| ことば | 20 (29.0) | 212 (26.4) | 232 (26.6) | N. S. |
| 書籍 | 15 (21.7) | 210 (26.2) | 225 (25.8) | N. S. |
| スポーツをする | 10 (14.5) | 107 (13.3) | 117 (13.4) | N. S. |
| 旅行 | 8 (11.6) | 105 (13.1) | 113 (13.0) | N. S. |
| 女性としての生き方 | 10 (14.5) | 53 (6.6) | 63 (7.2) | P<0.01 |
| スポーツ観戦 | 3 (4.3) | 35 (4.4) | 38 (4.4) | N. S. |
| スポーツ用品 | 1 (1.4) | 4 (0.5) | 5 (0.6) | N. S. |
| 食べ物 | 0 (0.0) | 2 (0.2) | 2 (0.2) | N. S. |
| その他 | 2 (2.9) | 24 (3.0) | 26 (3.0) | N. S. |
| 対象者の数 | 69 (100.0) | 802 (100.0) | 871 (100.0) | — |

(N.A.=82)

IV. 考 察

1990年の日本たばこ産業の調査⁴⁾によると、我が国の喫煙者率は成人男性60.5%、成人女性14.3%であり、近年、女性の喫煙者率が増加しているといっても未だ男女間の差が大きい。この男女間の差が大きいことは日本特有のものであり、一般的に欧米の喫煙者率は男女の差は小さく、1983年の米国成人の喫煙者率¹⁵⁾は男性34.8%、女性29.5%であった。今回の青年期女性の喫煙者率は7.5%と低率であった。両親、特に母親の喫煙習慣が子供の喫煙

図2 喫煙に対する一般的意識



□ 喫煙者 + 非喫煙者

習慣と関連をもつことは数々の調査¹⁶⁾¹⁷⁾で明らかにされているが、今回の結果では、父親、母親の喫煙習慣共に子供の喫煙習慣とは関連が認められなかった。村松¹⁶⁾、富永¹⁷⁾らの調査は対象者が大学生以下の年齢であるのに対し、今回は対象者の約30%が社会人であり、喫煙着手の要因も異なるのであろう。両親の喫煙に代る他の要因を探るためには社会人を対象とした調査が必要であろう。

今回の調査で喫煙者の日常生活にはいくつかの特徴がみられた。喫煙者は非喫煙者に比べ小遣い金額が多く、喫煙習慣と経済面が密接に関係していることが伺える。喫煙者率と所得との関連¹⁸⁾については男女とも全般に所得が高いほど喫煙者率が高く、特に女性にその傾向が強いことが明らかにされている。喫煙者は自動車を運転する、酒を飲む習慣がある、化粧をする、といった非喫煙者とは異なった行動が今回の調査で明らかになったが、これらの特徴も金銭的な条件と無関係とはいえない。

喫煙習慣と他の健康習慣との関連について明らかになったことは、喫煙者は毎日朝食をとらない、睡眠時間が短いなどの習慣を中心に、喫煙者は非喫煙者に比べて全般的にライ

図3 エゴグラム
(喫煙習慣別)

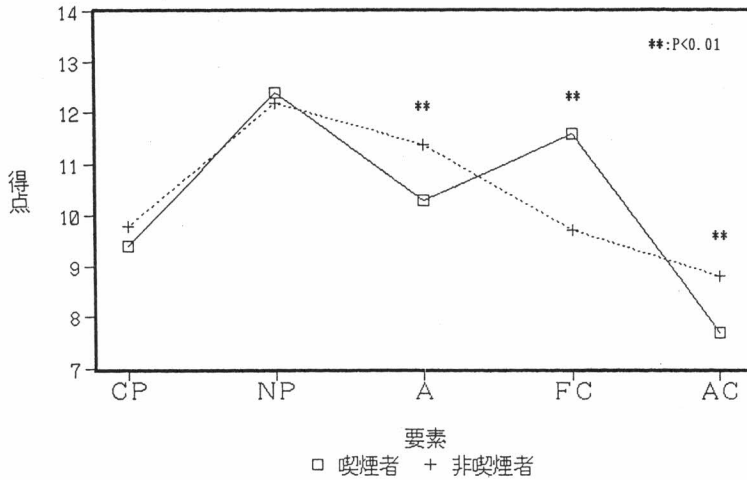
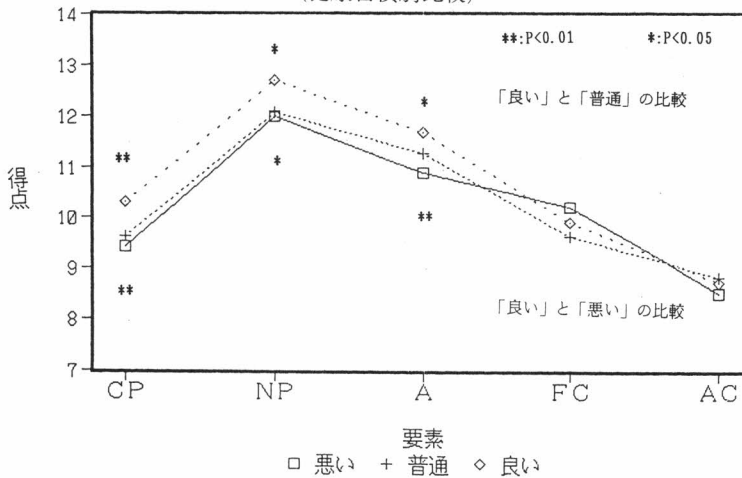


図4 エゴグラム
(健康習慣別比較)



フスタイルがよくない傾向にある。すなわち、喫煙者は健康に対する意識が薄いと考えられる。多々納ら¹⁹⁾も、非喫煙者は健康意識が高いことを報告しており、今回の結果からも、ライフスタイルの良い者は生活全般において好ましい生活習慣を行っており(すなわち、健康意識が高い)、ライフスタイルの悪い者は好ましい生活習慣を行っていない(すなわち、健康意識が低い)ことが伺える。

永山ら²⁰⁾は、日常生活習慣は各々が独立に健康に影響を及ぼすと同時に、相互の絡みあいの中で作用していくものであると

指摘している。小川²¹⁾は「喫煙習慣は健康に対する価値づけの相対的低さと関係がある」と指摘している。この価値づけがいつごろ、何によって形成されるかは個人によって差があるところであるが、家族や友人からの情報と同様にマスメディアからの情報も無視できない。書籍を読むこと、テレビを見る時間、CMに対する興味にはいずれも喫煙習慣とは関連が見られなかったが、喫煙者は女性誌を読む、非喫煙者は新聞を読む時間が長かった。女性誌と新聞がそれぞれの読者に与える情報の質の違いも「健康に対する価値づけ」形成に係わりがあるのではなかろうか。近年、医学・公衆衛生学上の課題が急性感染症から慢性・非感染症の疾病(成人病)へと変化²²⁾してきたが、これらの成人病は個々の日常生活習慣に大きく起因している。成人病の第一次予防として、健康に対する価値づけが必要である。

喫煙についてどのような認識をもっているかの比較では、喫煙者と非喫煙者の差が最も顕著であったのは情緒的項目であり、喫煙者は喫煙に肯定的であった。情緒的項目には喫煙してはじめて体感できる項目が多いことから、この結果は必然であろう。しかし喫煙の身体影響に関する項目である身体的項目では喫煙習慣別に回答に差が見られた。大学生、社会人にとって、いわゆる「たばこの害」は周知であると考えられているが、認識は一律でないことが伺える。これを反映してか、喫煙の倫理的項目では両者の回答は多くの項目で違いが見られた。今後、社会では「禁煙」「分煙」の方策がさらに広げられるであろうが、これらの方策を円滑に進めるためには喫煙に対する認識ができるかぎり同様であることが必要であり、そのためにも喫煙の健康影響に関する多方面の新しい情報を繰り返し周知させることが重要である。

喫煙者と非喫煙者のエゴグラムを比較してみると、喫煙者は、FC(自由奔放さ)が高く、A(客観的判断力)、AC(順応性)が低い。つまり、相手を認め共感する心を持ち、天真爛漫で活発だが、客観的に判断することを不得手とし、自己中心性が強く協調性に欠けるといことになる。喫煙者の外向的性格については多くの報告²¹⁾²³⁾がみられる。今回の日常生活の調査でも、喫煙者は自動車運転を楽しむ、コーヒーや酒を飲む、化粧をする、流行として女性の生き方を取り入れる、周囲の目を気にしないという外向的な行動パターンをとっていることが明らかになった。このことは村松の報告⁸⁾と一致している。

宮城²⁴⁾は、社会的に、女らしさが求められ、女性の喫煙に反対する傾向があると報告しており、AC(順応性)が高い非喫煙者は社会に適應しようとする性格傾向のために喫煙しないと考えられる。大津²⁵⁾は、エゴグラムを使用し、中・高校生の飲酒行動に関する調査を行い、飲酒傾向と心理的特性の関連を報告している。それによると、飲酒の促進要因はFCであり、抑制要因はAであった。本研究では、喫煙者はFCが高く、非喫煙者はAが高かった。すなわち喫煙者と飲酒者、非喫煙者と非飲酒者がそれぞれ類似しており、喫煙行動と飲酒行動は心理的要因の面からは深い関連を持っているといえる。

健康習慣別にみたエゴグラムでは、3群ともNP優位型であったが、ライフスタイルの良い者はCP、NP、Aが高かった。すなわち、様々な情報を批判的に見、客観的に判断し、思いやりを持って行動する力がある、といえる、健康に関する情報に対してもこのような性格特性で対処しているものと推測される。また、ライフスタイルの良い者は他の2者と比べ、全体的に自我状態が高い値を示していることから、精神エネルギーが高いといえる。つまり、人生が楽しく充実している者の多い群¹²⁾といえるだろう。また、ライフスタイルの悪い者の特徴として決断力が乏しい(Aが低い)傾向がみられたが、Breslow⁹⁾によると、決断力が乏しく精神的に不安の強い者、抑うつ強い者、生活に満足していない者は、不健康な状態に陥りやすいとされている。

今日、たばこ会社はたばこのテレビCMの自主規制に伴い、たばこ会社がスポンサーになるコンサート等各種イベントを年々増加させたり²⁶⁾、青少年や女性に的をしばったと思われるたばこCMを放映している。今回の結果から言うと、物事を批判的に見ず、自由奔放が喫煙者の性格特性であり、客観的判断力が低く、思いやりがすくないのがライフスタイルの悪い者の性格特性であり、さらに周囲の目を気にせずに行動することを考えると、これらイベントやCMが女性喫煙者の増加の一因と考えられている²⁷⁾ことは納得できる。

今回の調査で、流行を取り入れる対象として、喫煙者が「女性としての生き方」と答え

ているのも看過できない。たばこと共にある女性の生き方をよしとするのか、あるいはたばこなしの生き方をよしとするかは、それらたばこの販売促進活動に大きく影響されるのではないかと考えるからである。

今日では女性の喫煙は喫煙者本人への影響だけでなく、胎児や乳幼児に悪影響を及ぼしていることは周知の事実となっている⁶⁾⁷⁾。浅野²⁸⁾は「自らの嗜好を満たすための能動的喫煙は第一の喫煙 (primary smoking)、その喫煙者が排出するたばこ煙を否定なく吸わされる受動的喫煙は第二の喫煙 (secondary smoking)、妊娠女性が喫煙している時に胎児が経験する第三の喫煙 (tertiary smoking) は女性に特有な生命現象と関連した出来事である」としており、女性の喫煙問題は重要さを増している。

V. 要 約

青年期女性を対象にして、日常生活行動様式や Breslow の 7 つの健康習慣 (ライフスタイル) と喫煙習慣との関連を調査し、さらに、性格特性がそれらにどう関連しているかを追究することを目的とし、無記名質問紙法により、平成 4 年 9 月～11 月に調査を行い、以下に示す成績を得た。

- (1) 対象の喫煙者率は 7.5% であり、両親の喫煙とは関連は認められなかった。
- (2) 喫煙者は自動車運転を楽しむ、コーヒーや酒を飲む、化粧をする、流行として女性の生き方を取り入れる、周囲の目を気にしないなどの外向的な行動パターンをとっていることが認められた。
- (3) 喫煙者は毎日朝食をとらない、睡眠時間が短い、栄養のバランスに気をつけないなど、健康に対する価値づけが低いということが認められた。
- (4) 喫煙者は喫煙に対して肯定的な認識を持ち、非喫煙者は喫煙に対して否定的であった。喫煙者、非喫煙者間で最も喫煙に対する認識に差がみられたのは、情緒的意識 (精神が集中できる、落ち着くなど) であった。
- (5) 喫煙者のエゴグラムでは FC (自由奔放さ) が高く、A (客観的判断力)、AC (順応性) が低かった。つまり、天真爛漫で活発だが協調性に欠ける。それに比較して、非喫煙者のエゴグラムでは A、AC が高く、FC が低かった。すなわち非喫煙者は社会適応度が高いことが認められた。

以上のことから、青年期女性の喫煙習慣とライフスタイル、性格特性にはそれぞれ関連があることが示唆された。

〈参考文献〉

- 1) U. S. Public Health Service : Smoking and Health, Report of Advisory Committee to the Surgeon General of Public Health Service, U. S. Department of Health, Education and Welfare, PHS Publication (Washington) No. 1103, 1964
- 2) Royal College of Physicians : Smoking or Health, A Report of the Royal College of Physicians, Pitman Medical, 1977
- 3) U. S. Department of Health, Education and Welfare : Smoking and Health, A Report of the Surgeon General, Public Health Service, DHEW Publication No (PHS), 79-50066, 1979
- 4) 日本たばこ産業 : 平成 2 年全国たばこ喫煙者率調査, 調査結果の概要, 1990
- 5) 浅野牧茂 : 女性と未成年者喫煙への警鐘, たばこの健康学, 147～195, 大修館書店, 1987

- 6) Royal College of Physicians : Smoking or Health, A Report of the Royal College of Physicians, Pitman Medical, 87~97, 1977
- 7) U. S. Department of Health, Education and Welfare : Smoking and Health, A Report of the Surgeon General, Public Health Service, DHEW Publication No (PHS), 79-50066, Pregnancy and Infant Health, Chapter 8 (1~93), 1979
- 8) 村松園江：女子学生の喫煙行動と生活習慣の係わりに関する研究，第1報，生活習慣および喫煙に対する意識について，日本公衛誌，32 (11)，675~686，1985
- 9) Breslow, L., et al. : Health and Ways of Living, (1983) ; 生活習慣と健康，森本兼曩監訳，60~98，HBJ 出版局，1989
- 10) 村松常司：タバコに係る小・中・高校生のイメージに関する研究，学校保健研究，27 (9)，431~441，1985
- 11) 杉田峰康：交流分析・ゲシュタルト療法，心身医学，22 (5)，420~425，1982
- 12) 末松弘行，他：エゴグラム・パターン (TEG 東大式エゴグラムによる性格分析)，金子書房，1990
- 13) Dusay J. M. : EGOGRAMS, How I See You and You See Me, (1977) ; エゴグラム，池見西次郎監修，創元社，1983
- 14) 日本 MMPI 研究会編：日本版 MMPI ハンドブック，15~19，三京房，1973
- 15) U. S. Department of Health and Human Services : Review and Evaluation of Smoking Cessation Methods, The United States and Canada (1978~1985) ; 小田清一訳著，アメリカ禁煙事情，21~23，社会保険出版社，1990
- 16) 村松常司，他：喫煙の経験・習慣に影響を及ぼす諸要因の研究，第2報，男子大学新入生について，学校保健研究，18 (1)，34~39，1976
- 17) 富永祐民，他：中学生の喫煙行動および喫煙に対する態度と知識，喫煙と健康に関する調査研究，昭和55年度健康づくり等調査報告書，219~232，1981
- 18) 小川浩：喫煙習慣の社会的・心理的背景，現代医学，28 (1)，119~126，1980
- 19) 多々納秀雄，他：喫煙行動の形成・変容過程に関する考察，健康科学，第7巻，11~28，1985
- 20) 永山育子，他：農業従事者の喫煙習慣と食品および栄養素摂取との関連，日本公衛誌，36 (5)，332~339，1989
- 21) 小川浩：喫煙の心理，公衆衛生，50 (4)，236~244，1986
- 22) 三浦邦彦，他：Life Style・各種日常生活習慣の内的相関構造解析に関する研究，日本公衛誌，32(10)，特別付録，1，1985
- 23) Eysenck, J. H. : 喫煙習慣の継続と性格，喫煙行動，(Dunn, W. L. Jr 編)，広田君美監訳，人間の科学社，149~197，1975
- 24) 宮城音弥：タバコと性格，タバコ，講談社現代新書702，講談社，95~125，1987
- 25) 大津一義：中・高校生の飲酒行動に関する研究，その2，自我状態のパターンと飲酒傾向との関連について，学校保健研究，29 (8)，377~388，1987
- 26) 中日新聞：TVだめなら冠コンサート，1990年11月20日 (火)，夕刊
- 27) 斎藤麗子：増加する女性・未成年者の喫煙，保健婦雑誌，44 (4)，23~28，1988
- 28) 浅野牧茂：メディコピア⑦，喫煙と女性，第三の喫煙，150~159，富士レボ，1987

(平成6年8月22日受理)